

旅客船に関する学習機会提供の組織的な取り組み事例*

A systematic approach for providing opportunities for learning passenger ships*

宮地岳志**・藤井敬治***・山田雅之****・赤穴真理*****・三上堂子*****

By Takeshi MIYAJI**・Keiji FUJII***・Masayuki YAMADA****・Mari AKANA*****・Takako MIKAMI*****

1. はじめに

離島と本土を結ぶ旅客船（離島航路）は島民の通学・通勤・通院・買い物のための不可欠な移動手段としての役割を果たしている。しかし多くの離島航路では島の過疎化・高齢化に伴い、利用者数が減少している。この減少を食い止めるため行政を中心に離島航路活性化策や離島振興策が検討・実施されている。一方、教育現場では過疎化問題、環境問題や地域の歴史・自然・暮らし等、社会との関わりを題材とした学習機会が求められており、こうした場で旅客船及び島に関する理解を深めることは重要である。本稿では、旅客船事業者、行政、島のコミュニティが一体となり、旅客船や島の歴史、自然、暮らしなどに関する学習機会の提供を組織的に取り組んだ事例を紹介する。

2. 離島航路の課題と既存の取り組み

山口県では、現在14航路（内、2航路は山口運輸支局管轄区域外）の離島航路が運航されている。輸送人員（山口運輸支局管内）は年々減少しており、平成20年度は約567千人で平成11年から約113千人減少している。これは離島の人口減少と高齢化が進行していることにも一因があると思われる。

一方で、離島にとって航路は本土を結ぶ唯一の移動手段であり、今後その重要性は増すものと考えられる。

こうした状況を踏まえ、地方自治体は航路の維持・存続や離島の活性化を図るため、離島の資源を活かしたイベントの開催や地域間交流を図るなどしている。

しかし、これらの取り組みは、自治体、旅客船事業者、地域住民等それぞれが個別に行っているため、取り組みが限定され、地域が抱える社会問題を包括的に解決する

*キーワード：モビリティ・マネジメント（MM）

**正員、工修、株式会社バイタルリード広島支店

（広島市安佐南区緑井4-33-9、TEL&FAX082-876-2809）

***非会員、大島商船高等専門学校

****非会員、国土交通省中国運輸局山口運輸支局

*****非会員、株式会社バイタルリード広島支店

*****非会員、株式会社バイタルリード広島支店

ことは困難な状況である。そのため、今後これらの問題を解決し、地域の活性化を図るためには、個々が連携し組織的に行うことが重要である。

3. 本プロジェクトの取り組み内容

(1) プロジェクトの目的

本プロジェクトは、旅客船教室を通じて地域の抱える問題を解決するため、その普及促進について調査・検討を行い、モデル地域における旅客船教室の開催を通して円滑に教室を開催するためのマニュアルと教材の検討を行うことを目的として実施した。また、旅客船の利用促進を図るため、旅客船教室の参加者には、生活航路の役割や島の魅力について認識を深めてもらった。

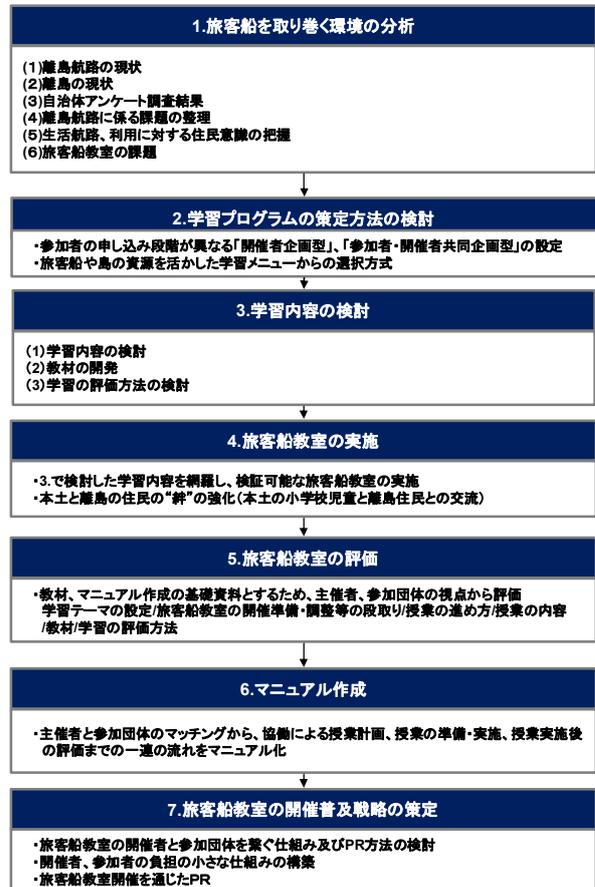


図1 プロジェクトの取り組みフロー

(2) 学習プログラムの策定方法の検討

本プロジェクトでは、参加者の申し込みのタイミングが異なる2つの教室開催方法を提案した。1つは開催者が日時や体験の種類などを全て設定し、開催が決定してから参加者を募集する「開催者企画型」であり、もう1つは開催可能な体験・講義の中から、参加者が希望のものを選択し、開催者と調整をしながら完成する「参加者・開催者共同企画型」である。

開催者企画型では、参加者の対象を絞り込みニーズにあった学習プログラムを策定し、参加者・開催者共同企画型では、参加者自身が学習ニーズに対応する学習テーマを選択し、学習プログラムを策定することが重要である。

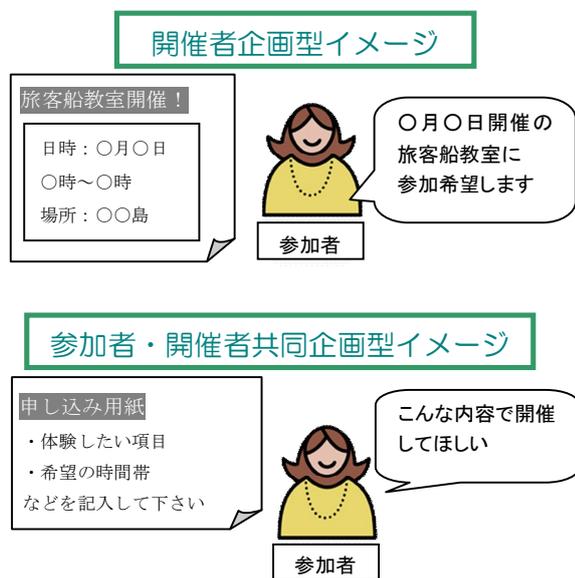


図2 教室開催方法のイメージ図

(3) 学習内容の検討

a) 学習テーマ

旅客船、離島に関する意識向上及び旅客船の利用促進に資する学習テーマとして①旅客船の利用方法（乗り方、降り方、乗船マナー）、②離島の移動手段の確保、③バリアフリー、④旅客船の避難方法、⑤船や港の特徴・役割、⑥離島の歴史、⑦離島の文化、⑧離島の自然、⑨離島の暮らし、の9つのテーマを設定した。

b) 教材

生活航路、離島に関する意識の醸成・行動変容を図るため、「自ら考える」、「実生活に繋がる」、「学習内容を情報発信する」という視点から教材の開発を行った。

自ら考える教材とするために、問いかけ形式（クイズ形式）を採用した。



図3 クイズボードの例

c) 評価

旅客船教室開催の効果を計測し改善を行うために学習の評価シートを作成し、参加者（児童、保護者）、開催者に学習テーマ、学習計画の策定、開催のための準備・調整、実施方法等についてアンケート調査を行った。

(4) 旅客船教室の実施

a) 参加者及び開催者

今回のモデル教室は周南市立今宿小学校の児童及び保護者を対象に公募し、開催者企画型で行った。参加者は小学生児童9名、未就学児1名、保護者3名、引率教師1名の計14名であった。開催者の主なメンバーは、周南市生活安全課、大津島支所、大津島巡航株式会社、今宿小学校、大津島地区コミュニティ推進協議会、徳山小学校区コミュニティ推進協議会、学識経験者（大島商船高専准教授）、山口運輸支局である。

b) 開催者の役割分担

旅客船教室の開催においては、様々な関係者の協力が不可欠であり、開催者として参加してもらうことでよりスムーズに運営することが可能となる。

今回は山口運輸支局が実施主体となり、学校関係者には参加者との連絡調整、学識経験者や旅客船事業者にはプログラムの一部受け持ち、更に、教室当日に協力が不可欠な離島住民との調整については自治体やコミュニティ推進協議会の協力を得るなど、委員会の各委員自ら主体的に参加してもらった。

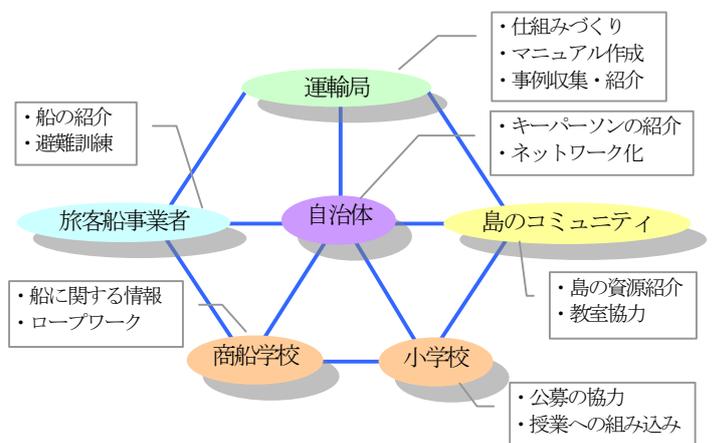


図4 開催者の役割

c) 実施内容

徳山港から旅客船（鼓海Ⅱ）に乗船し、大津島で石風呂体験や調理実習、山越え、回天記念館の見学等を行った。旅客船の中では、クイズや講義を通じて旅客船の利用方法や離島の移動手段の確保、バリアフリー、船や港の特徴・役割について学習を行った。

表1 スケジュール

開始時間	内容（学習テーマ）	担当者	場所
8：15	切符購入体験	事務局	徳山港切符売り場前
	オリエンテーション	事務局	
8：30	旅客船乗船	旅客船乗務員	徳山港
8：35	講義1：船内での非常事態における避難方法について	旅客船船長、大津島巡航(株)専務	旅客船：鼓海Ⅱ内
	クイズ、講義2 ・旅客船の利用方法 ・離島の移動手段の確保 ・バリアフリー ・船や港の特徴・役割	事務局	
	講義3：いろいろな船について	大島商船高専教官	
	操舵室見学	旅客船船長	
9：45	大津島到着（下船）	旅客船乗務員	大津島 本浦港
10：00	石風呂体験	大津島コミュニティ会長	石風呂（本浦）
10：45	調理実習	大津島の方	大津公民館
12：00	昼食	大津島婦人会	
12：50	山越え		本浦～馬島
13：50	回天記念館見学	回天記念館職員	回天記念館
14：50	回天発射場跡見学		回天発射場跡地
15：10	ロープの結び方講習	大島商船高専教官	馬島港
15：35	旅客船乗船		馬島港
15：53	旅客船下船		徳山港
16：00	宿題の説明	事務局	徳山港切符売り場隣室
16：10	終わりのあいさつ	大島商船高専教官	



鼓海Ⅱ



旅客船内での座学



操舵室の見学



石風呂体験



調理実習



山越え



回天記念館の見学

図5 旅客船教室の様子

(5) 旅客船教室の評価

旅客船教室の実施により各主体から様々な評価が得られた。ここでは特に開催者側の代表的な意見を以下に示す。

①学習テーマの内容

- ・学年別に理解できる質問を用意する等の配慮が必要。
- ・時間配分に注意が必要。

②学習プログラムのための打合せ方法

- ・早め早めの調整を行う必要がある。

③公募による参加者募集

- ・今回は特定の小学校に限って行ったが、できれば市内の小学校・中学校に実施できないか。
- ・学校側との協議・検討が必要。
- ・子ども会等へ働きかけを行えば、反応が早いのではないか。

④アンケートの実施

- ・充実・改善を図るためには必要だと思う。

⑤参加者による作品の掲載について

- ・TV、新聞、市広報、図書館、公民館等へ情報提供をしてはどうか。
- ・船内や待合所に掲示してはどうか。
- ・温かみを感じられるので良い。

⑥その他（自由意見）

- ・大津島の観光資源を整備し、PRすれば来訪者が増えるのではないか。
- ・参加者を公募して年数回実施してはどうか。
- ・参加費は行政が半額負担してはどうか。
- ・飛行機と船の違い、船の種類による役割・特徴、徳山港への搬入品の状況等を説明してはどうか。
- ・継続するためには、人的な支援や魅力的な内容の設定が必要である。

(6) マニュアル作成

今後、旅客船事業者や生活航路を有する自治体が主催することを想定し、「旅客船教室開催マニュアル」を作成した。マニュアルでは、開催者と参加団体のマッチングから、協働による授業計画、授業の準備・実施、授業実施後の評価までの一連の流れを整理した。



図6 旅客船教室開催マニュアル

(7) 旅客船教室の開催普及戦略の策定

旅客船教室を開催するためには、開催希望者と参加希望団体を繋ぐ仕組みが必要である。そのような仕組みが無い場合、開催者と参加者が繋がらず、また調整コストが多くなる場合がある。

このような状況を踏まえ、山口運輸支局内における開催者と参加者を繋ぐ仕組みと、旅客船教室について認識してもらい、より多くの人に参加してもらうためのPR方法について検討した結果を示す。

a) 開催者と参加者を繋ぐ仕組み

山口運輸支局内では、窓口を山口運輸支局、生活航路を有する自治体、旅客船事業者とし、開催情報は山口運輸支局が一元管理する。開催者は旅客船教室に関する情報を市役所や旅客船、港等の施設への提示、ちらし配布、自組織のHPに掲載する。参加希望者は応募用紙に必要事項を記入し、窓口へ提出する。

b) 参加対象者を絞ったPR方法

旅客船教室について認知して参加してもらうためには広くPRを行うことは重要であるが、より効果的に普及促進を図るために、参加対象者を絞って集中的にPRすることも重要である。参加対象者が小学生の場合、学校の授業の一環として実施することが効果的であるが、そのためには授業カリキュラムを検討する1、2月の前までに学校に情報提供し、調整を行う必要がある。今回は、校長会で旅客船教室の説明を行い、協力を依頼した。

c) 旅客船教室を通じたPR方法

旅客船教室の開催自体がPRの一環となるように、参加者が作成した標語、短歌、写真、絵などを海上交通に

る。また、参加者の再訪を促す工夫も重要であり、思い出に残るグッズとして、旅客船のペーパークラフトを作成した。



図7 参加者の作品（絵日記）



図8 ペーパークラフト

4. おわりに

本稿では、山口県内における離島航路に関する学習機会提供の組織的な取り組み事例を紹介した。この取り組みにより、主催者と参加者それぞれのニーズを繋ぎ、地域の関係者が一体となり離島航路を取り巻く社会問題を包括的に学習する仕組みを構築することができた。これを足がかりに、旅客船教室実施の広がりを期待するところである。

しかし、これらの仕組みを構築してもなお、教室実施にあたっては、その時々により臨機応変な対応が求められる場面があると思われる。そのため、参加団体それぞれの特性に合った楽しく学べるハンドメイドの学習プログラム、教材の作成を行うことが、参加者への強いメッセージとなり、旅客船教室の成功に結びつくと考える。